



昨年初頭に公開され、全国で50万人以上が劇場に足を運んだ映画『禅 ZEN』。道元禅師のご生涯をベースにした物語が、全国に清冽な感動を届けました。今号では監督・脚本を努められた高橋伴明氏に、この映画について伺いました。三菱銀行人質事件を描いた『TATOO [刺青] あり』(1982) や連合赤軍事件を描いた『光の雨』(2001) など、社会性の高い作品で人間への鋭い洞察を続ける監督が、今の時代に道元禅師の物語で何を伝えたかったのでしょうか？

(写真提供:飯田裕子 聞き手:板倉)

◎この映画に関わられる以前から、監督には尊敬する宗教家が3人いらつしやうって、その一人が道元禅師だったそうですね。

高橋 父親が高校2年で急に亡くなったのがきっかけで「人間は死んだらどうなるんだ」ということが聞きたくなり、(出身地の)奈良の菩提寺が主催する仏教青年会に入ったんですけれど、若僧が質問ばかりするものだから随分煙たがられていたと思いますよ。その後も高野山やキリスト教の教会に行ったり、曹洞宗のお寺にも行きました。そして色々文献を調べた中で、道元さんの清廉で一徹なところ、日蓮さんや親鸞さんみたいな波乱万丈が表向きは全然見えてこないけれど、ひたすら

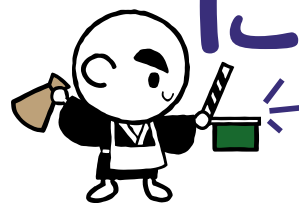
◎映画には原作(『永平の風道元の生涯』大谷哲夫・著)がありますが、大胆な換骨奪胎が試みられています。最初に原作を拝見されて、やはり変えていかなければいけないと思われましたか？

高橋 “映画屋” は原作通りにやろう

# 今こそ伝えたい、 継承の物語

高橋伴明氏「映画『禅 ZEN』監督・脚本」に聞く

# 曹洞禅を物語に



かつて、作家の里見弴氏は道元禅師の小説を書こうとしながら、結果的に随筆に改編せざるを得なかった、と言います。それから半世紀余り隔て、昨年は曹洞禅へのナラティブ・アプローチを試みた作品が多数発表されました。視覚言語での安易な伝達を忌避する宗風にも関わらず、試みられたそれらの作品の創作への挑戦を探ります。



高橋伴明 1949年、奈良県生まれ。映画監督。『TATOO [刺青] あり』(1982)で「一般劇場用映画に進出後、脚本・演出・プロデュースと幅広く活躍。

## 道元禅師は刺激的である

つすぐ。そこがすごく印象に残ってたんですね。

もともと、これまでの映画では真逆のことばかり描いていました(笑)。でも誤解を恐れずに言えば、宗教家の視点か犯罪者の視点か、どちらの側から描くかだけの違いで、自分の中では今までと別の映画を作ったわけではありません。

例えば、徹底的にワルを描いたとして、何でそういうワルをするに至ったのかということ表現したいわけで、それが今回は、僕が知り得た範囲での道元さんに、僕にとつての宗教家の理想を重ねた部分がありますね。道元さんに「こうして欲しい」とか「こう言うて欲しい」とか。